

第四章 仏教経済学

仏教の八正道⁽¹⁾の一つに「正しい生活」がある。したがつて、仏教経済学があつてしかるべきである。

仏教国では、人びとは伝統を忠実に守りたいとよくいう。ビルマがその例で、「新しいビルマは、宗教と経済的進歩の間には矛盾はない」と考える。健全な精神と物質的な豊かさは矛盾するものではなく、本来両立するものである⁽²⁾とか、「伝統の中にある宗教的・精神的価値と近代技術の便益をうまく組み合わせることができる」⁽³⁾とか、「理想と行動とを信仰に合致させるのがビルマ人の神聖な義務であり、必ずそれを成しとげる」などといわれている。

ところが、こういう仏教国は、現代経済学のモデルを使つて経済開発計画を立てることができると、いつも考えている。そして、いわゆる先進国の現代経済学者を招いて、政策の立案やら開発の枠組、つまり五カ年計画のようなものを策定する上で助言を求めている。現代の唯物主義的な生活様式から現代経済学が生まれたように、仏教徒の生活様式が仏教経済学を要求することに思いついている人は見当たらない。

それには何の前提もないという形而上学的な誤りをよくおかしている。その中には、経済法則というものが重力の法則のように、「形而上学」ないし「価値」と無縁であると主張している者さえいる。しかし、ここでは方法論の論議に立ち入る必要はない。その代わりに、基本的な問題をとりあげて、それを現代経済学から見た場合と、仏教経済学から見た場合とで、どのように違うかを眺めてみよう。

富の基本的な源泉が人間の労働であるという点については、だれしも異論はないところである。さて、現代の経済学者は「労働」や仕事を必要悪ぐらいにしか考えない教育を受けている。雇い主の観念からすれば、労働はしょせん一つのコストにすぎず、これは、たとえばオートメーションを取り入れて、理想的にはゼロにしたいところである。労働者の観点からいえば、労働は「非効用」である。働くということは、余暇と楽しみを犠牲にすることであり、この犠牲を償うのが賃金ということになる。したがつて、雇い主からすれば、理想は雇い人なしで生産することであるし、雇い人の立場からいえば、働かないで所得を得ることである。

このような態度が理論と実践に及ぼす影響は、いうまでもなくきわめて甚大である。仕事についての理想が仕事を逃れることであるとすれば、「仕事を減らせる」ならどんな方法でもよいことになる。オートメーションを別とすれば、いちばん効果のある方法は、いわゆる「分業」であり、その古典的な例がアダム・スミスの『国富論^(四)』で賞讃された「針工場」であ

る。ここで扱われているのは、人類が大昔から行なつてきた通常の分業ではなくて、一つの完結した生産工程を分割して、完成品を高速度で生産できるようにする分業であり、この分業では、個々の労働者はまったく無意味で訓練もほとんどいらない手足の動作だけを繰り返せばよいのである。

仏教的な観点からすると、仕事の役割というものは少なくとも三つある。人間にその能力を發揮・向上させる場を与えること、一つの仕事を他の人たちとともにすることを通じて自己中心的な態度を棄てさせること、そして最後に、まつとうな生活に必要な財とサービスを造り出すことである。

ここでも、このような考え方の影響するところは甚大である。仕事というものを労働者にとつて無意味で退屈で、いやになるような、ないしは神経をすりへらすようなものにすることは、犯罪ストレスである。それは人間よりモノに注意を向けることであり、慈悲心を欠くことであり、人間の生活のいちばん遅れた面にやみくもに執着することである。同じように、仕事の代わりに余暇を求めるのは、人生の基本的な真理を正しく理解していないことを示すものである。その真理とは、仕事と余暇とは相補つて生という一つの過程を作つているのであって、二つを切り離してしまふと、仕事の喜びも余暇の楽しみも失われてしまうということである。

仏教徒の立場からすれば、機械化には二種類あつて、それははつきりと区別しなければな

らない。第一は人間の技能と能力を高める機械化であり、第二は人間の仕事を機械という奴隸に引き渡し、人間をその奴隸への奉仕者にしてしまう機械化である。この二つを識別するには、どうしたらよいだろうか。

現代の西欧事情に精通し、東洋の古代にも詳しいアナンダ・クマーラスワーミーが次のようについて述べている。「仕事に当たる職人自身が、求められればいつでも機械と道具の微妙な違いを示すことができる。じゅうたんを織る機^{はた}は、縦糸をピンと張って、その間に職人の指で毛糸が織りこまれるように考案された道具である。一方、動力織機は機械である。それが文化の破壊者だというのは、仕事の中で本質的に人間が行なうべき部分を機械が行なうからである」。したがつて、仏教経済学は、文明の核心が欲望を増長することではなく、人間性を純化することにあると考えるのであるから、現代の唯物主義の経済学とは当然いちじるしく異なる。人間性はおもに仕事を通じて培^{つちか}われる。自信をもつてのびのびと仕事をすれば、仕事をする当人とその作る物はすばらしいものになる。インドの哲学者であり経済学者でもあるJ・C・クマラッパは、この点を次のようにまとめている。

「仕事というものの性質が正しく把握され、実行されるならば、仕事と人間の高尚な能力との関係は、食物と身体の関係と同じになるだろう。仕事は人間を向上させ、活力を与える、その最高の能力を引き出すように促す。仕事は人間の自由意志を正しい方向にむけ、人間の中に住む野獸を手なずけて、よい道を歩ませる。仕事は人間がその価値観を明らかにし、人格

を向上する上で最良の舞台になる^(六)

人間は仕事がまったく見つからないと、絶望に陥るが、それは単に収入がなくなるからではなくて、今述べたような、規律正しい仕事だけがもつていて、人間を豊かにし活力を与える要素が失われてしまうのが原因である。現代の経済学者は、完全雇用は「引き合うか」とか、労働の移動性を高め、賃金をもつと安定させるためには、完全雇用よりやや低めの雇用状態で経済を運営するのがより「経済的」ではないか、などについて精緻な研究を行なうだろう。その場合、成功の決め手になるのは、一定期間に生産される財の量である。ガルブレイス教授は『ゆたかな社会』の中で次のように述べている。「財貨の限界緊要性が低ければ、労働力のうちの限界的な一人あるいは百万人を雇用する緊要性も低い。」また「安定のためにある程度の失業を認めてよい——ついでながら、これは明瞭に保守主義的な仮定の立場である——という（ほどに生産の必要性の緊急度が低い）のであれば、失業者が現在の生活水準を保てるだけの財貨を彼らに与えることができるはずである」^(七)

仏教的な考え方からすれば、この発言は真理をさかさまにしたもの、モノを人間より尊び、創造的活動より消費を重視するものである。それが意味するところは、力点を労働者から労働の生産物に移すということであり、いい換えれば、人間から人間以下のものに移すことであり、惡の力に屈伏することである。仏教経済学で経済計画を作るとすれば、まず完全雇用の計画から出発するだろう。そして、その目標は「家庭外の」仕事を求めるすべての人たち

に職を与えることである。雇用の極大化でも、生産の極大化でもない。婦人は、一般的にいつ、「家庭外の」仕事を求めないものだから、会社や工場で婦人が大規模に雇用されているのは、経済運営の重大な失敗のしるしと見られるだろう。とりわけ、幼い子供を放任して、母親を工場で働くことは、熟練労働者を軍人として使うのが現代経済学者の目に不経済に映るのと同様、仏教経済学者から見て不経済である。

唯物主義者が主としてモノに関心を払うのに対し、仏教徒は解脱(イギ)（悟り）に主たる関心を向ける。だが、仏教は「中道」⁽²⁾であるから、けつして物的な福祉を敵視しはしない。解脱を妨げるのは富そのものではなく、富への執着なのである。楽しいことを享受することそれ自体ではなく、それを焦(シガ)れ求める心なのである。仏教経済学の基調は、したがつて簡素と非暴力である。経済学者の観点からみて、仏教徒の生活がすばらしいのは、その様式がきわめて合理的なこと、つまり驚くほどわずかな手段でもつて十分な満足を得ていることである。

現代経済学者には、これが非常に理解しにくい。「生活水準」を測る場合、多く消費する人が消費の少ない人より「豊かである」という前提に立つて、年間消費量を尺度にするのがつなだからである。仏教経済学者にいわせれば、この方法はたいへん不合理である。そのわけは、消費は人間が幸福を得る一手段にすぎず、理想は最小限の消費で最大限の幸福を得ることであるはずだからである。

そこで、もしも衣服の目的とするところが一定の快適な温度と見た目によさだとすると、

この目的を、最小限の労力、つまり年間の衣服の消耗を最小限にし、衣服のデザインももつとも簡素にすることで達成しなければならない。このような労力が少なければ少ないほど、芸術的創造に力と時間を割くことができる。たとえば、裁断しない布を巧みにひだをとつてまとえずつと美しくなるのだから、現代のヨーロッパ風の手の込んだ仕立てはきわめて不経済である。布地が早く傷んでしまうような仕立ては愚の骨頂であるし、しかもでき上がりたものが醜かつたり、みすぼらしかつたりするのでは、野蛮もいいところであろう。衣服について述べたことは、他の必需品のすべてに当てはまる。モノの所有と消費とは、目的を達成するための手段である。仏教経済学は、一定の目的をいかにして最小限の手段で達成するかについて、組織的に研究するものである。

これに反して現代経済学は、消費が経済活動の唯一の目的であると考えて、土地・労働・資本といった生産要素をその手段と見る。つまり、仏教経済学が適正規模の消費で人間としての満足を極大化しようとするのに対して、現代経済学者は、適正規模の生産努力で消費を極大化しようと/or>する。消費を適正規模に抑える生活様式をとるには、最大限の消費への欲求を満たす場合よりはるかに少ない努力で足りることは見やすい道理である。であるから、たとえばビルマではアメリカと比べて、省力機械はほとんど使われていないのに、生活の圧迫感、緊張感が非常に少ないのも驚くには当たらないのである。

簡素と非暴力とが深く関連していることは明らかである。適正規模の消費は、比較的に低

い消費量で高い満足感を与え、これによつて人びとは圧迫感や緊張感なしに暮らし、「すべて悪しきことをせず、善いことを実践し」⁽³⁾ という仏教の第一の戒律を守ることができ。物的資源には限りがあるのだから、自分の必要をわずかな資源で満たす人々は、これをたくさん使う人たちよりも相争うことが少ないので理の当然である。同じように、地域社会の中で高度に自給自足的な暮らしをしている人々は、世界各国との貿易に頼つて生活している人たちよりも、戦争などに巻きこまれることがまれである。

そこで、仏教経済学の見地からするならば、地域の必要に応じ、地域でとれる資源を使つて生産を行なうのが、もつとも合理的な経済生活ということになる。遠い外国からの輸入に頼り、その結果、見知らぬ遠い国の人たちに輸出品を送りこむために生産を行なうといったことは、例外的な場合、またごく小規模な場合はともかくとして、きわめて不経済なことである。現代経済学者が通勤のための高い交通費は不幸であつて、生活水準の高さを意味するものではないと認めているのと同様に、仏教経済学者は、欲求を満たすのに手近にある資源を使わずに、遠隔地の資源に頼るのは、経済的成功どころか、むしろ失敗だと主張するのである。現代経済学者は、国民一人当たりの輸送量（一マイル当たりのトン数で表示される）の数値が上がれば、それが経済的進歩の証左だというが、この同じ数値が仏教経済学者にかかると、消費の様式が悪化した指標となる。

現代経済学と仏教経済学のもう一つのいちじるしい違いは、天然資源の使用について生じ

てくる。著名なフランスの政治哲学者のベルトラン・ド・ジュヴネルが「西欧人」の性格づけを行なつてゐるが、これは偏りのない現代経済学者像といつてよいだろう。

「西欧人は人間の労力以外のものを支出とは認めようとしない。鉱物を、もつと悪いことは生命あるものをどれほど浪費しているかを気にかけているとは思えない。人間の生命といふものが、さまざまの生命からなる生態系の一部分だということを理解していないようである。世界は都市の支配下にあり、その都市では人間が他の生命から切り離されているので、生態系の部分であるという感覚が戻つていかない。そこで、水や樹木のような、人間が究極的に依存しているものが、手荒で軽率に取り扱われてゐる」^(八)

これに対しても、釈尊の教えは、いつさいの生物に対してだけではなく、とりわけ樹木に対して敬虔で優しい態度で接することを求める。すべての仏教徒には、何年おきかに一本の木を植え、これがしつかりと根づくまで見守る義務がある。そして、仏教経済学者は、万人がこの義務を守るならば、外国援助がまつたくなくても、本当の高度な経済開発ができることが容易に証明できるのである。東南アジア（他の地域も同様であるが）の経済が振わないわけは、疑いもなく森林を許しがたいほどなおざりにしてきたことによるのである。

現代経済学では、その方法論がカネで表わした価格によつてすべてのものを同一化し、数量化するものである以上、再生可能な物質と再生不能の物質とを区別しない。その結果、石炭、石油、薪たきぎ、水力といった、たがいに代替できる燃料の間の唯一の違いは、現代経済学者

にとつては、一単位当たりの相対コストだけになる。もつともコストの低いものが当然好まれる。これがいちばん合理的、「経済的」だからである。

仏教経済学者にいわせれば、もちろんこれでは駄目である。石炭、石油のような再生不能の燃料と、薪や水力のような再生可能な燃料との間に、本質的な違いがあるのであって、この違いはけつして無視できない。再生不能財は、やむをえない場合に限つて使うべきもので、その場合でも、それを保全するためには最善の注意と細心の配慮を払わなければならない。こういう財を不用意に、ぜいたくに使うことは、一種の暴力行為である。現実には完全な非暴力ということはありえないかも知れないが、何を行なうにしても非暴力の理想を目指すのが、人間としての絶対的義務である。

ヨーロッパの経済学者とともに、ヨーロッパの美術品が全部高値でアメリカに売れた場合、これを経済的大成功とは思わないだろう。これとまったく同様に、仏教経済学者は再生不能の燃料に頼つて生活する人たちを、所得ではなく資本を食つて寄生的な生活をしているものと主張するだろう。そのような生活様式は、長続きできず、まったく一時的な方便としてしか許されまい。石炭、石油、天然ガスといった再生不能の燃料資源は、その地域的分布がきわめて偏つており、総量にも限界があるから、それをどんどんと掘り出していくのは、自然に対する暴力行為であり、それはまず間違いなく、人間同士の暴力沙汰にまで発展するものである。

この一事だけでも、仏教国にありながら、昔から伝わる宗教的・精神的価値を顧みず、で
きるだけ早く現代経済学の唯物主義を取り入れようと熱望している人たちの反省の材料にな
るだろう。仏教経済学などは昔をなつかしむ夢物語にすぎないとして排斥する前に、現代経
済学が描いているような経済開発のやり方で本当に自分たちの希望が達成できるのかどう
か、反省する気になるのではなかろうか。『人類の未来の課題』と題する大胆な書物の終わり
のところで、カリフオルニア工科大学のハリソン・ブラウン教授は、次のような評価を下し
ている。

「このように、工業社会が根本的に安定を欠き、農業社会に立ち戻つていく傾向があるよう
に、工業社会の内部においても、個人の自由を保障している諸条件が揺らいできて、組織の
管理化と全体主義的な統制を押しつけるような諸条件を抑えきれなくなつてきている。事
実、工業文明の存続を脅かす今後の難問題を一つ一つ検討してみると、社会の安定の達成と
個人の自由の維持とをどうやって両立させていくことができるのか、疑問になつてくる」
〔元〕

この発言は長期に関する評価だからという理由で無視するとしても、では今日、宗教や精
神の価値を無視して行なわれている「近代化」なるものが、本当によい成果をあげているの
かという当面の疑問が残る。一般大衆に関する限りは、その成果たるや惨憺たるものであり、
農村経済は崩壊し、町でも村でも失業が大幅に増え、栄養不良か、でなければ心のすさんだ
都市貧民層が発生しているのである。

仏教経済学の研究を、精神や宗教の価値よりも経済成長のほうが重要だと信じている人た
ちにもすすめたいのは、現在われわれが経験している困難と将来の予想との一つを考えての
ことである。ところは、問題は「近代的成長」をとるか「伝統的停滞」を選ぶかの選択で
はないからである。問題は正しい経済成長の道、唯物主義者の無頓着と伝統主義者の沈滞の
間の中道、つまり八正道の「正しき生活」を見出すことである。

〔原註〕

本章の参考書 *Asia : A Handbook* (edited by Guy Wint, Anthony Blond Ltd., London, 1966).

1 *The New Burma* (Economic and Social Board, Government of the Union of Burma,
1954).

二 回右。

三 回右。

四 *Wealth of Nations* by Adam Smith.

五 *Art and Swadeshi* by Ananda K. Coomaraswamy (Ganesh & Co, Madras).

六 *Economy of Permanence* by J. C. Kumarappa (Sarva-Seva Sangh Publication, Raighat,
Kashi, 4th edn., 1958).

七 *The Affluent Society* by John Kenneth Galbraith (Penguin Books Ltd., 1962) (『豊かな
社会』 鈴木哲太郎訳、岩波書店)。

社会】 鈴木哲太郎訳、岩波書店)。

- 八 A Philosophy of Indian Economic Development by Richard B. Gregg (Navajivan Publishing House, Ahmedabad, 1958).
- 九 The Challenge of Man's Future by Harrison Brown (The Viking Press, New York, 1954).

〔仏教〕

- 1 八正道とは、正しい見解、正しき決意、正しき言葉、正しき行為、正しき生活、正しき努力、正しこ思念、正しこ瞑想である。『仏教』渡辺照宏著、岩波新書。
- 2 中道とは、1の八正道を指し、「本能的生活と苦行生活との両極端を行ふの」と説明されてゐる（前掲書）。
- 3 仏教の有名な章句の一つに、「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」の前半分を指す。訳は前掲書による。